
AINo.S

斎藤 吉織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A I N O . S

【Nコード】

N 3 4 0 7 S

【作者名】

斎藤 壱織

【あらすじ】

想像を絶するような歴史の果て、人類がその繁栄を宇宙にまで広げた1/n 0(n)の時代。人類は異次元から来たる破壊兵器”忌機”の襲撃を受けていた。戦乱と混乱が収束する宇宙に生まれた5人の兵器と5人の人間は出会い可能性は爆縮を開始する。過去 伝奇 と未来 可能性 が0へと至るその時、終わるのは物語か、宇宙か… の幻想が集う混沌SF活劇小説、堂々開幕！！

No1・斉藤 計一郎

人類が想像を絶するような長い長い歴史の果て…

瓦礫に座る少女は、赤く光る石を片手に空を見上げる

星も何もない、ただ闇と…太陽と呼ぶには大きすぎる光が映る空を…

少女の周りには何もない、砂と塵と灰だけだ

まるで辛うじて少女と瓦礫だけが滅びを免れたかのように

否、滅びはもうそこまで来ているのだろう

空の光は、目に見える速さで広がり音もなく空を白く染め上げている
大地が、怯えるように震え始めた

少女は屈み地面を撫でて、なだめるように優しい声で呟いた

「大丈夫・・・次は絶対、こんな事にはしないから・・・だから・・・」

少女は揺れる地面を気にもせず立ち上がり、広がっていく滅びに向けて赤い宝を掲げた。

滅びの光が、石を通して虹色の輝きを放つ

「だから、また待っていてください！！」

138億年・・・いや、もっとかかるかもしれないけど・・・きつとどうかして見せる」

少女は虹色の光の中にその姿を消していく・・・

「人の想像しうることは、すべて起こりうる事科学現象なのだから・・・」

やがて・・・大地も人も・・・宇宙さえも・・・すべてが消滅した。

A I N O ・ S

星歴3276年・・・地球が爆発して数千年と経つ時代

人類は地球の消滅を予見して宇宙へと旅立ち、今となっては銀河中にその活動を広げていた。

ワーブ 蟲穴航法やテラフォーミング 創星技術を駆使し地球の外に勢力を拡大していった人類はやがて…

かつては国が陸の一部から陸そのものへ、その周囲の海へ、空へとその定義を広げていったように
国の定義を銀河の一部とした。

そしてその頃になって人類は、新たな脅威と対峙することとなったのである。

『忌機』・・・異次元から外宇宙に表れるそれを、人類はそう呼んだ。

それがどの次元から現れるのか、何の目的で、何のために現れるのかは誰にもわからない。

しかし、やつらはその行う破壊行動から明らかに…人類の『敵』だった。

しかし、いつどんな時代、どんな敵が居ようとも

結局人間にとって一番恐ろしいものとは人間であることに変わりはない。

銀河の一部を掌握する軍事国家、『奉雷』陸軍に所属する齋藤計一郎少尉も、そんな驚異の一つである。

…否、この男は別に人類に対する驚異というわけではない。
忌機にさえも、というより主に忌機に対して彼は絶対的な驚異であり、寧ろ人類から英雄と呼ばれてもおかしくはないのだ。

ただその戦いの余波が途方もなく大きすぎるだけなのである。曰く『人型暴走戦車』、曰く『歩く無差別破壊兵器』、曰く『人類の突

然変異』、曰く『類人猿最強の猛獣』
様々に言いたい放題なあだ名の一つを借りれば、斎藤計一郎は齒止めを知らない戦闘狂だった。

奉雷国边境惑星…高馬原全線基地

タカマガハラ

『こちら第八小队、ドラム缶野郎が多すぎる！！
中隊長！！至急応援を！！繰り返す、至急応援を…ギヤアアアア！！』

「第八小队！！どうした、返事をしろ！！
くそつ、応援も何もこつちだつてドラムだらけだつてのに！！
死神小队はまだなのか！！」

『いつ！！？人型暴走戦車をよんじまったのかよ！！』

「死ぬ可能性が減るだけマシだ！！」

忌機の侵攻は前触れもなくやってくる。
奉雷中最も外宇宙に面した边境のとある全線基地では、宇宙より飛来する人類の敵が空も地面も埋め尽くしていた。
マニ車のように未知の言語の掘られた浮遊するドラム缶のような物体：マニタイプの最もオーソドックスな忌機…いわゆる雑兵の群れである。

しかし地上も空も埋めるその圧倒的な質量と不意打ちの優勢、人類の奮闘むなしく基地が陥落するのも時間の問題となっていた。

しかし、その大軍の一部が…ゴバア！！という爆発音とともに一部消滅する。

『!!!い・・・今は!!!』

「来た!!!死神小队：斉藤計一郎だ!!!」

ゴバア!!!ガキン!!!ドゴ!!!ズバ!!!ドカン!!!と、凄まじい速さで忌機の大群が一人の男の手によって瓦礫の山となって行くさまが基地に残った人々の目にも見え、彼らの眼に希望の光が灯り始めた...が

『あ、あれ?あれ、こっちに近づいてきてないか?』

ドツカンドツカン!ドツカン!と、破壊音がこちらに近づいて来る度に、通信先の隊員は不安げに呟く。

その予想は当たっていた。

忌機達は既に蜘蛛の子を散らすごとく撤退を始めている...しかし、逃げる方向を間違えたのか忌機の一部が基地の方へと近づいてきているのである。

「...!!!やばい、あいつをこっちに近付けるな!!!斉藤が来るぞお!!!」

中隊長の声は、先ほどよりも恐ろしい危機に直面し明らかに別次元の焦りを見せていた。

残った弾薬の総てを総動員し、忌機に浴びせようとした...しかし

「うわ速い!!!斉藤の方が忌機より早い!!!こっち来るなアあああああ!!!」

そして1週間後

武將ひげを生やし、頬に小さい傷跡、天然パーマの髪を縦横無尽に延ばした男、斉藤計一郎はパイプ椅子に括りつけられたまま、その当時の映像を見せられていた。

「以上が高馬原前線基地消滅の顛末じゃ」

映像を斉藤に見せていた張本人、白い髭を蓄えた伊崎將軍は映像をその後の基地の悲惨な姿へと移しかえる。まるで巨人に踏みつぶされたかのように天井は崩落し平たい地面が続いており、嘗てそこに準備さえあれば忌機へ十分に対処できていたであろう前線基地の面影はまるでなかった。

「死人が出なかったからいいようなものじゃが、これは明らかにやり過ぎだとは思わぬかね？」

斉藤計一郎少尉？」

「ああ、少しやりすぎた感はあるかもな」

明らかに斉藤を責める將軍の言葉にも、斉藤はへらへらと笑いながら忠誠心も反省も見せず応えている。

「こちとら忌機をせん滅する事が仕事なもんでね」

「違うだろう、中隊長からの命令は『忌機から基地を護る事』であつて、『基地』と忌機をせん滅する事』ではないじゃろうが！！」

バン！と、机をたたたく將軍。

しかし齊藤の相変わらず將軍をあざ笑う笑みは崩れない。

「きちんと準備さえしていれば、あの程度の忌機には十分対処できていたんだろう？」

それが出来ず、俺に頼み、人員の緊急避難も済ませていた…あそこの中隊長は優秀だぜ
事の顛末まで読めていた訳だ」

「…呆れたやつじゃな前は、まるで自分が爆弾だと自覚しておるような物言いではないか」

將軍の呆れたような言葉に、齊藤の口が三日月のように…ニイイイイと歪み不敵な笑みを浮かべる。

「そつだぜ將軍。俺は歩く無差別破壊兵器、齊藤計一郎だ

俺は忌機の破壊さえできれば、いいや戦う事さえできればそれでいいのさ

それに見合う戦果も、敵への打撃も、結果として前線の確保もしている

それ以上の何を求めるつもりだよ？俺達は兵隊さんだぜ？」

挑発するような齊藤の言葉に、將軍はきっぱりと返した。

「軍人としての矜持だ」

將軍の言葉に、齊藤は呆れたような溜息をつく。

「は、それこそ無意味じゃねえか」

「ああ、そう直ぐ理解してもらえとも思っておらぬよ。この狂人が」

將軍は手元に天井からたらされた縄を引く。

すると、ジャキン！！ガコン！！と、斉藤のパイプ椅子の周りから特殊合金の檻がせりあがり、天井から蓋が降りてきてコンテナのような形状となる。

「・・・何の冗談だ？」

斉藤はブチブチと自身をパイプ椅子に括りつける縄を力づくで引きちぎった。

すると將軍は部屋中に反響するような大声を張り上げて言い放つ。

「斉藤計一郎少尉！！」

貴殿のこれまでの英雄的活躍を認め、ナカツクニ首都所在惑星中津国本部への移転を認める！！

これは確定事項である！！！！！！」

將軍は開き直ったかのように斉藤の功績をたたえ、その報償を高らかに述べた。

しかし、斉藤の顔には驚愕と、まるで呼吸をすることを否定されたかのような絶望が張りついた。

「んな！！？ちよつと待ちやがれクソ將軍！！首都本部だと！！？

あそこは忌機侵攻のいの字もしの字もねえ

馬鹿見てえに平和なところだろうが！！！！」

「だから英雄的活躍を認めた上での報償というておるじゃろうが、よく休め戦闘狂」

今度は將軍が不敵な笑みを浮かべる、先ほどとはまるで立場が逆転していた。

「てめえこの、クソ將軍が！！あつちで破壊の限りを尽くしてやるぞゴラアア！！？」

「その時は軍からの除名処分が待っておるがな」

ぐが、と斉藤の言葉が詰まる。

そう、斉藤計一郎は戦闘狂なのだ。

暴れられる場所を奪う事は、野球少年からバットとグローブを没収する事に等しい。

「ほれ、英雄を宇宙港まで送ってやりなさい」
「ハッ！！」

將軍の言葉とともに、部屋に先ほどの中隊長と隊員が大挙して押し寄せ

斉藤が入った檻を神輿のように担いで、祭りのようにソイヤ！ソイヤ！ソイヤ！ソイヤ！！と掛け声をあげながら運んでいく。

斉藤は猛獣のように檻に手をかけてガチャガチャと暴れながら、怒りを將軍にぶつけるように吠える。

「くそがあああああ！！！！おいテメエクソ將軍！！覚えてやがれ！！！！」

絶対エ戻ってきてブチ殺してやるからなアあああああ！！！！」

將軍はふおっふおっふおと笑いながら、斉藤との別れを惜しむようにおどけてハンカチを振る。

「さらばだ糞つたれ。ちよつと首都で頭、冷やして来い」

> i 1 5 6 6 0 — 5 1 8 <

奉雷国首都所在星：ナカツクニ中津国奉雷軍本部

「……………最悪だ、もう最悪でしかねえ」

口から魂と思しき何かをため息と共に吐きながら、斉藤は新たに貸し与えられた高級マンションの一室に三角座りをして落ち込んでいた。

用意周到な事に、嘗て斉藤が住んでいた簡易住居にそなえつけられていた家具、食器、トレーニング用具、重火器コレクション（火薬エネルギー弾薬は全て抜き取られている）、果ては冷蔵庫の中の食品に至るまで

寸分の違いもなく新しい住居に備え付けなおされていた。

本部に配属された先はよりによって首都巡回警備部 軍事国家である奉雷は軍が警察機構の一部を担当している為、首都巡回警備部とは即ち『おまわりさん』のことである ……これは戦闘狂である斉藤にとって地獄にも等しい待遇であった。

「もうこうなったら本気で事件起こそうか…あのクソ將軍にひと泡吹かせてから死ぬっていうのもいいかもしれねえなあ」

ぐげげげげげ…と、今度は邪悪な笑みを浮かべながらよからぬ事を企む斉藤の耳に、携帯端末からのコールサインが届く。

「ち、なんだよ…」と、いらだたしげに端末のスイッチを押す

と、そこには軍内部で催される規格の一覧が映し出された。

「なにになに…？新型戦闘機の運用と忌機への超次元攻撃手段模索…
テストパイロット募集う？」

「ニイイイイイイ、と斉藤の口がまた三日月のように歪み不敵な
笑みとなる。

「これだ…！」

斉藤は直ぐに立ちあがり、乱暴に玄関のドアを開けて軍の本部集合
場所へと向かった。

本部の通路を歩いている内に、斉藤は見知った人影を見つけた。
見間違いかとも思ったが、彼女の特徴的な赤い髪はそうそう見間違
える訳もないので声をかけてみる。

「おう、夏目じゃねえか」

「はりや、サイトーじゃないか？今度は首都本部でも破壊しに来た
のかい？」

ケラケラ笑いながら斉藤と普通に接するこの少女の名は夏目ヘンデ
リック、斉藤とは旧知の中であり親友を自称する稀有な少女である。
背は低く実際軍に所属するのも可笑しい程幼い少女だが、彼女は天
才なのである。

その天才的頭脳はこれまで幾多もの進んだ技術を奉雷軍に与え、今
では奉雷軍先端兵器開発部門主任の地位まで昇り詰めている。

マッドサイエンティストでもあり、斉藤と初めて会ったその当時も

『ちょっとその身体能力、解剖して研究させてくれ!』

と斉藤に詰め寄った事もあるのを斉藤は覚えている。

冗談だと思っていたのに実際お茶に混ぜて強力な麻酔を飲まされて解剖実験され、一週間後起きた時には針の跡も残さず元の状態に戻されていた

その時はさすがの斎藤もこの少女の恐ろしさに本気で恐怖したという。

夏目としてもクジラを3カ月にわたって昏倒させるくらいに威力の麻酔で、あれほど回復が早く実験期間が短くなってしまうのも驚きだそうだが

しかしそのすぐ後に斉藤の身体能力で扱っても簡単に壊れず、その上ド派手な威力の新兵器を斉藤に与え仲直りしたのは今となっては好い思い出だ。

・・・少なくとも二人にとっては。

その後に辺境の都市一つが丸々つぶれる『事故』があつてからこの二人は会っていなかった。否、伊崎將軍の手によつて巧みに合わないように人事異動させられていた。

そんな奉雷軍きつての『問題児』二人が今ここに奇跡の邂逅を果たしたのは、首都星上層部のミスに他ならないのだが、それはまた別の話。

「ちょっと伊崎の馬鹿にこつちへ無理矢理移転させられてな、軍人に矜持がどうのこうのって・・・」

「伊崎が？はっはぁん、あの子を君に任せるつもりだねえ？」

「?」

何を想ったのか、にやりと笑う夏目に斉藤は首をかしげる。
そして直ぐに合点がいったようにぼむっと掌に拳を置く。

「そうか、この新型戦闘機ってお前の作った奴か」

「当たり前！！」

夏目はご機嫌そうに歳相応の仕草で斉藤を誉める。

「そう言う事ならプレゼンも斉藤にもよく解るように言ってあげないとね、先に席について待ってておくれよ」

テストパイロットに志願するなら私から手をまわしておくよん、大事に使ってあげてねえ」

「おう、退屈しないように頼むぜ！！」

スキップしながら控室へ向かう夏目を見送り、斉藤も良く解らなかつたが思い道理の展開になるようなので心の中でスキップし鼻歌を歌いながら席へと向かった。

「…即ち異相次元体ONNe00を異相変換し3次元に鉱石状の物体として固化する事で神経回路と同等の働きを持った全く新しいエネルギー鉱石が誕生したのです」

我々はこれを万魔殿の諸事記を元に荒御魂ドライブと名付け有効利用に着手してきました」

そしてこの荒御魂ドライブを推進機関に接続することで3次元上に異相次元へと干渉し得る特異点を発生させる事に成功し・・・」

「ぐがあ〜…んぐお〜…」

夏目の説明をかき消す程のいびきが説明会を支配していた、原因は当然斉藤である。

「…………ケフン！！えへん！！」

「んが？」

夏目は咳払いで斉藤を起こすと、さてと一息ついて説明を続行した。

「さて、聡明なれど戦う気もない将校諸君はともかく、馬鹿で粗野だけどやる気だけは溢れる戦争屋どもの皆様方には
専門的な理屈やら何やらは理解できないお方も多い事でしょう、なのでかいつまんだ簡単な説明をこれから行おうと思います」

斉藤の周りでその存在に怯えている兵士諸君は「こいつと一緒にするな」と言いたくてたまらないような表情をするが
それを無視して夏目は中空に浮かんだ立体映像の板に、ペンで絵を描いていく

すると夏目の背後の大画面にその絵が連動して描き足されていった。

「まずは、忌機の仕組みから話を勧めましょう…」

忌機とはそもそも異次元に住まう何らかの知的生命の送り込んだ兵器であるというのが我々の一般的な見解です。

このエネルギーが何処から来るのかといえ、忌機の破壊活動そのものであると我々は考えています。

異相次元とはそもそもこの宇宙と重なって存在しており、基本的に干渉は不可能となっておりますが

忌機はその次元の壁を越えて実際に干渉してきます。

その時に生まれる破壊エネルギーはこの世界に重なってあちらの物を破壊せずともそのエネルギーのみを向こうに存在する忌機の本体もしくは操縦者に供給する事になります。

つまり、破壊活動そのものが忌機の食事なのです。

逆に忌機を一体破壊しても、向こうにエネルギーがいき、向こうの物質的資源である忌機が一体減るだけです。

では忌機を破壊し尽くせばいいのかといえば、そうしても恐らく物理的にこちらの負けになってしまうでしょう。

忌機は常軌を逸した物量で攻めてきます。それは向こうの物理的資源が限りなく無限に近いという事

そんな質量の敵と総力戦をしたらこちらの負けは確実です」

淡々とした夏目の言葉に、斉藤を除く兵士たちの表情は暗くなる。

「そこで新たに作った新兵器が、『荒御魂ドライブ』です

これは、特殊な方法で合成したエネルギー結晶体『荒御魂』を戦闘機に搭載する事で運用エネルギー供給をこれのみで補える他

通常兵器に次元断層：つまり忌機へのダメージをそのままあちら側へ与える特異点を形成する事ができるようになります」

「へえ、つまりそれを積むだけで燃料もいらさずあちら側へ直に攻撃できる兵器になるってことか」

斉藤の言葉を聴き、夏目は満足そうな笑みでペンを斉藤に向けて頷く。

「その通りです、斉藤少尉に花マルをあげましょう

ただ、荒御魂ドライブは制御が難しくまたこれを搭載した兵器の運用には特殊な技能と一種のセンスが必要となります

場合によっては二度と戦えなくなることも十分に在り得ます
テストパイロットへ志願する方は…それでも宜しいという方のみ手
をあげて下さい」

説明会に参加した多くの兵が息をのむ、それほどに夏目は真剣な眼
差いで説明会に参加した全員を見据えていた。

誰もが我こそはと名乗りを上げる事を迷う中、迷わず手をあげたの
は斉藤だった。

「は、戦えなくなつたらなんてお前が考えるかよ

そつなつたら松葉杖でもそのポンコツ戦闘機とやらでも敵に投げつ
けてやるさ」

斉藤の言葉に、夏目は安心したのか笑顔を斉藤に向ける。

「…よろしい、では斉藤計一郎少尉、早速手続きをしにガレージに
行きましょうか」

「? おお…」

そうして斉藤と夏目の二人が説明会から去っていく姿を見て、参加
した兵士たちはこつそりと話を始める。

「お、おい…あれ人型大量破壊兵器の斉藤じゃないか…?」

「おい今気がついたのかよ!? あいつが最新機のパイロットって…
てか何でこんな所に居るんだよ?」

「ああ…ついに中津国もおしまいか…いやまで、さっきの注釈のま
んまなら斉藤も…」

.....。

「失敗しますよーにつ……！！」

残された奉雷軍人たちは、切実にそう願ったという。

照明の明かりもなく、何も見えない闇に包まれた格納庫に連れてこられた斉藤は夏目に問いかける。

「しかし良いのか？折角新兵器のお披露目なんだろう、派手好きのお前なら新型戦闘機も大々的に公開するだろうと思ってたんだが？」

「さっき言った荒御魂ドライブの搭載方法がね、詳しくは軍事機密なの

…特定法生命概念項目特例124条に漏れなく触れちゃってね、だから『あの子』だけは試験パイロットくらいにしか合わせちゃいけない事になってるのよ」

「あ？」

パチイン！

斉藤が片眉をあげて疑問の声をあげたその時、夏目のはじいた指の音を合図にするように格納庫の照明が灯り

一瞬真っ白になった視界に切れ長の目を更に細めた斉藤は、光の向こうに立つ巨大な人影と…

その直前にちよこんと立つ小さい小さい人影を見る。

「はじめまして！であります！！」

小さい影はまだ声変わりも済んでいないのか高く可愛らしい声を張り上げて、斉藤に敬礼する。

「奉雷陸軍忌機対策部特殊戦闘機先行試験部隊、サイノ型特殊兵装機仮設1号機であります！」

ライトグリーンンのショートヘアーから伸びる二本の結晶体アンテナが、まるで犬猫の耳のようにピンと立ち

丸い瞳で斎藤を見つめる少女、サイノ特機1号。

時の果ての未来で、この二人の出会いがすべての始まりを告げた。

> i 2 8 9 8 2 | 5 1 8 <

No1-2・サイノ特機1号機

「チェンジで」

特機1号の聞いた斉藤の初めの言葉はそれだった。

悲しいかな地球が吹き飛んで3000年も経とうがそういった文化がなくならないのが人類という生き物の性である。

それはともかくとして斉藤は眉ひとつ動かすこともなくほぼ即答という形で1号の自己紹介に反すこともなくチェンジを要求した。

これには夏目も一瞬呆けたのちに慌ててフォローせざるを得なかった。

「いやいやいやチェンジは無しだから、今の所でさすがにチェンジはないよ斉藤少尉い」

「いやおかしいだろ、何でガキがこんなところに居るんだよ。戦闘機の副座役にしたってこんなちっこいのがGに耐えられる訳ねえだろうがもうちよつとましな冗談用意しやがれ。」

そこで夏目は斉藤の致命的な勘違いに気付く。

「ああ、そういう事だね。それは勘違いだよ少尉、その子はただのパートナーという事でもないさね…1号、試しに動かしてみてくれないかい？」

「……あ、了解であります！」

1号と呼ばれた少女が腕を挙げて手をグーパーグーパーと握る、すると1号の後ろに佇んでいた巨人の手も重い音をあげて連動するよ

うに腕をあげて手をグーパーグーパーし始めたのだ。

「……おいこれはどういうこった」

「さつきからいった通りだよ少尉、この子が荒御霊ドライブ。正確にはそれを搭載した生体ガイノイドで、後ろのサイノ特機のコアユニット……まあ、より正確にいうなればこの子と後ろのロボットを纏めてサイノ特機というのさ」

「帰る」

またもや即答だった。

「……何か問題でもあったかな？」

首をかしげて当たり前のことを聞く夏目に、ついに斉藤の堪忍袋の緒が切れた。

「大ありだろうが！！つまり何か、危険って要するにガキ連れてお守しながら戦争行くのが危険ってことだろうが！！」

「まあ事を凝縮に凝縮を重ねていくなればそうなるねえ、下手すれば愛着がわいて戦争行きたくないーとかいう奴もいるだろうし
まあ斉藤少尉ならそんなこと言わないだろうから大丈夫だろうけど、逆に戦場でこの子たちを酷使しすぎて

荒御霊ドライブが精神エネルギー切らして発動しなくなるという危険性もある。

荒御霊ドライブはサイノ特機の燃料も兼ねているわけだから、この子たちの精神状態を保つことが何より優先になってしまっからね
子守りをしながら戦うっていうのはなかなか的を射た表現だねえ

ハッハッハ」

呑気に笑う夏目に斉藤は背を向けガレージを去ろうとする。

「いいのかい？ 戦闘狂の君がこの首都から戦場に復帰する唯一の機会なのかもしれないんだぜ？」

夏目は挑発するように言う、しかし斉藤少尉の答えは夏目にとって意外なものだった。

「胸糞悪いんだよ、ガキを戦場に送るんならざ」

そう言い残し、斉藤はバアンと荒々しくガレージの戸を閉めた。

「……ふむう、意外なもんだねえ……サイトーなら喜んで引き受けるとばかり踏んでいたんだけど……」

「……………」

首都所在惑星、ナカツクニ中津国。

領宙圏およそ直径6万光年の奉雷における首都の役割を持った惑星でありそれ故に銀河中の居住・生産・戦域を含む全植民地に繋がる数多くの固定化したスターゲイト蟲穴を保有し

国家のブレインであるがゆえに交通も情報も絶えず流動する。

頭でっかちの数えたがり屋どもが言うにはこの国の保有するニュースや情報の類のデータ総量はこの惑星の持つあらゆる情報媒体にまらべんなく記録しても足りないほどであり、それ故に流通することで情報の鮮度を維持し銀河の半分を統治するシステムなのである。

それ故に中つ国のシステムの中で最も徹底した管理は『交通』に割り当てられ、そのシステムのほとんどを機械で補っている。

つまり何が言いたいかというと、この中つ国で交番勤めの警備員という職業は「楽して大金を稼げる銀河1理想的な職場」であり、一方で死ぬほど暇な経つか座るかだけの平和窮まりない職務なのである。

「はあ〜あ暇だ暇だ…いつそ誰か俺を殺してくれえ」

交番で机に向かい、物騒な一人文句をはいて斉藤はうなだれていた。首都の警備である以上給料は高く安定した仕事ではある、しかし斉藤にとっては戦場こそが生きがいだっただ。

安定という言葉は斉藤にとってじわじわと効く猛毒に他ならなかった。

「あ〜…斉藤計一郎少尉って、ここに居るでありますか？」

そんな中、交番に佇んで問いかけてくる声に斉藤は聞きおぼえがあった。

顔をあげてみると…アンテナを隠す大きな帽子に、ガレージでみたパイロットスーツではなく

一般的な洋服に身を包んだ1号の姿がそこにはあった。

「…なんだ、ポンコツ兵器のおまけパーツのガキじゃねえか」

「んなつ、ポンコツ兵器でもないし、おまけパーツでもないでありますよう！…って、少尉殿でしたかっ」

本人にとつてもどこかおまけっぽいのが気になっているのか、それともポンコツと言われたことに腹を立てたのか

あるいはその両方に憤慨しつつも、1号は斉藤と気付きピシッと敬礼を送る。

斉藤はその頭に極力手加減をしたチョップを当ててその敬礼を崩させた。

「使えなけりゃポンコツ通り越してガラクタじゃねえか、ガキはガキらしく公園で遊んでやがれ」

「あうっ、そんな事できないでありますよ…これでも軍事機密の身ですから、それにここに来たのも夏目博士に許可をもらったうえでのお忍びであります」

そういえばあの時の巨大ロボも付いてきてないなと思いつつ、斉藤はとりあえず来いと1号を交番の中へ招き入れた。

「……………」

畳という文化は地球がまだあったころからずっと続いてきた奉雷の原点である文化圏から受け継がれてきたものだ。

流石に首都星の交番ともなると抗菌加工された合成素材による安上がりながらも機能的で清潔なものになっているが

それでも外見には他惑星の天然素材による畳とそんなに変わるわけでもない、住み心地もまた然り。

斎藤が務める交番の待合室はそういった意味でありふれた和室である。

それなのに1号はそわそわと落ち着かない様子であたりを見回し、頭のアンテナをピコピコと振り回していた。

「和室がそんなに珍しいか？」

「ひゃいつ！？え、ええそんな事はないであります。軍部にしては随分とこじんまりとした部屋だなあってであります！」

「実際ここじゃやる事が何もないからな…前任者はサボる事も考えてなかったよつで引き出しにはU・NOすらねえぞ？」

「ほあー…と気の抜けた声を出しつつ斎藤の話を興味深そうに聞く1号、しかし斎藤はそれが気に入らなくてしょうがないといった様子で

「んで何だ、夏目に連れ戻すようにでも言われたか？なら再度言っ
とけ、戦場でガキのお守りをやるくらいならここで暇を持て余して
安楽死するつてな」

「それ多分意味が違うと思うのでありますが…いえ、そんな用はこ
れっぽっちもないのであります」

ただ、少尉殿についていろいろと聞きたいことがあつてきたのであ
ります」

意外な返答に、斎藤は一瞬だけ眉を吊り上げた。

斎藤は自他共に認める人間兵器である、それ故に自分と対等に話し
てきたりするのは同じ小隊出身の屈強な馬鹿野郎くらいだったし
新兵がまともに斎藤のことを聞いてくるなんてこともありえなかつ
た、それだけ斎藤の戦いはスタンドアウエーであり、軍隊としてす
ら機能していないからだ。

そもそも、まともな人間がそんな生まれる時代を間違えた英雄はげものに恐
れもなく話しかけてくるはずがなかった。

まして斎藤のことを聞きたいというのも然りである。

「いえ…本当はそんな理由だったんであります。少尉殿が私のパイ

ロットになるといった時から、それでやっぱりキャンセルされちゃってからどんな人なんだろって思って軍歴をちょっとだけ見せてもらっていたのであります」

「おいおい、てめえみたいな餓鬼にホイホイ見せるほど軍の個人情報報つてのは軽いもんかよ」

「その辺は夏目博士にちょっと手伝ってもらったであります」

「……あいつ今度会ったらひん剥いて高馬原の軍宿舎（男性寮）に送りつけてやる……」

夏目に対し静かな怒りを燃やす斎藤をまあまあとなだめながら、1号は話を続ける。

改まって、人形には……まして脳の代わりに異次元の鉱物が詰まっているとは思えないほど真摯な瞳を斎藤に向けて。

「それで……少尉殿が私の肉体年齢よりも前のころから少年兵だったことも、忌機の侵攻で中隊を全滅させられたことも知ったのであります

だからこそ斎藤少尉はたった一人で忌機と戦う方法を研究し続け、実践し、それを能力といえるまで昇華させ犠牲はともかく結果としてこの国の軍隊を忌機と何ら問題なく戦えるようにして、忌機の侵攻も奉雷には比較的慎重な物となった」

「………まったく、個人情報も何もあつたもんじゃねえああ……だからどつした？」

斎藤は巻き毛の頭を掻き毟って、少しばかり怒気をはらんで1号を睨む。

それでも1号は引くこともなく、寧ろ身を乗り出して斎藤にその思いを告げた。

「私は少尉殿のように強くなりたいのであります…妹達を失う前に、大事な物をなくす前に

だから、パイロットになってとまでは言いません…ただ、私に強くなる方法を教えてほしいのであります！」

妹達…1号という名前と、彼女がサイノ特機のプロトタイプであるという所をみるとおそらくは、量産された後継機たちの事なのだろう。

その妹達を戦場で失わないためにおそらく1号は戦闘機から自律兵器と肩書きを変えてでも戦うつつもりなのだろう。

1号の本音を踏まえて、斎藤は…

「ねえよんなもん」

あっさりと、そしてあまりに冷たく1号を押し返した。

「あつっ…え……」

「それとも何か、お前はこう返してほしいわけか？」

『俺が強くなつたのは過去の悲劇を乗り越えて、もう2度と犠牲を出さないためにも前世紀の少年漫画よろしく修業を積んだからだ』

…確かに、仲間を皆殺しにされた事が悔しかったというのもあるさ、だがそれだけだ、俺はやつらが死んだことも自業自得と思っているんだよ。

戦場に立っているのは誰かのために戦うやつじゃねえ、自分の利益

のためだけに誰かを殺しても何も感じねえ、誰が犠牲になってもかまわねえ…戦場に立っていいのはそんな職業軍人だけだ、決して英雄なんかじゃねえ戦争屋なんだよ」

怒気を隠さず1号に詰め寄る斎藤、反して1号は臆することなく斎藤の目を見つめていた。

「それでも私は、英雄にならなきゃならないんです…！」

…斎藤は重く長いため息をついて、頭をボリボリと掻きながら観念したように言った。

「…：…言っても解らない馬鹿なら仕方ねえか…スパルタ教育になるからな、人間と変わらない肉体で産まれた事を後悔させてやるよ」

「…！ハイっ！ありがとうございますっ…！」

斎藤の言葉に輝くような笑顔を浮かべ、1号は頷いた。

同時刻、高天原本部。

指令室に通信音とともに夏目の声が訪れる。

『伊崎準将ー？イザキー？』

「やかましい、聞こえとるわい」

蓄えた白ひげをなでながら席に座り、伊崎準将は夏目の通信に応えた。

『齋藤がやってきて案の定特機に接触を持ったのだけれど、あなたの差し金だよな?』

「は?」

夏目の問いに伊崎は素っ頓狂な声を上げて返す。

『え?』

「…え、何やってるのあの馬鹿? 僕は奴を首都にやって少しは大人しくなってもらう為に送ったんだが?」

だんだんと伊崎の顔色が悪くなり、冷や汗がダラダラと流れ出し始める。

誤解だった事に気づき夏目もバツが悪そうにする。

「つまりなにか、あいつ本気でそっちで問題起こす気満々なのか…
うぐっ、胃が…」

『ま…まあ残念な事に齋藤少尉は特機計画に反対のようだったよ、伊崎の心配するようには…』

ビー!!ビー!!ビー!!ビー!!

と、夏目が胃痛に苦しみ出した伊崎をなだめようとフォローを始めた瞬間に、指令室に警戒を知らせるアラートが鳴り響いた。

『準将閣下!! 奉雷の広域探査に次元異相反転を確認、忌機です!! 反転場所は奉雷宇宙圏内部… 首都星中津国本部間近です!!!!』

「胃があアアアアアア！！！！！！！」

『い、伊崎iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！！！！！』

伊崎は今度こそ胃痛を起こして指令室に倒れ伏した。

『第1511緊急避難警報が発令されました、付近の皆さまは指定のシェルターに避難してください』

本部近辺の都市に警報が鳴り響き、住民に歩何を呼び掛ける声がき織たちの耳にも届いていた。

「1511つて…忌機！？なんでこんな所に！？」

「奴等が気まぐれ起こすなんて今に始まった事じゃねえだろう？」

動揺する1号を制するように斎藤は立ち上がって1号の肩に手を置く。

そしてそのまま交番を出ていこうとする斎藤を、はっと我に帰った1号は止めようとする。

「あ、待って下さい少尉！！どちらへ行くつもりでありますか！？」

「あ？ちよっくらお巡りさんの職務をこなしに行って来る」

番号の生死を耳に入れる前に、斎藤は懐に隠したアンカーガンを打ち出し付近のビルの壁を駆け昇って行った。

その余りの手際の良さ、ビルをかけたのぼる斎藤の人間離れした速さ

を目にして1号は再び啞然とした。

「アンカーガンなんてお巡りさんが持つてて良いんですか！
？というか早！！本当に人間でありますか！？」

「まああの突然変異的な身体能力にいくら突っ込んで意味ないよ」
続いて交番にやってきた夏目は、1号の手を引く。

「ほら、折角偶然に偶然が重なってできた千載一遇の機会だよ。1
号も出撃準備。」

「…っ！！」

夏目もまた研究者としての好奇心で歪んだ笑みを浮かべながら、齋藤の駆け昇って行ったビルを見上げた。

「あんた達にどれだけ活躍できるか見せてもらおうじゃないか、英雄殿？」

暗雲の中空間に平面のひびが入って割れたような穴が開いている、それが忌機の侵入口：次元の異相反転である。
そこからウジャウジャとドラム缶のようなManiタイプ忌機と、鏡の球体のような忌機：Hezと呼ばれる忌機がなだれ込んでくる。常識を超えた量で、まるで雪崩のように。

『迎撃システム起動、忌機を最終防衛ラインで迎撃開始！！』

しかし今まで忌機の侵攻を防いできた奉雷の兵器群は路上で逃げ惑う人々の手を借りる事も無く自動的に忌機へと照準を定め秒読みを開始した。

『3』

対して忌機もその雪崩の先端にHeZの隊列を組み、まるで分子の配列のように間を開けてポジションを固定する。

『2』

そしてその隊列がまるで一つの鏡盤であるかのように高速で回転を始める。

『1…!! 迎撃開始!!』

そして迎撃システムによる総攻撃が始まった。

爆音が首都を包む、膨大な量のミサイルと最新のエネルギー兵器が一機一機確実に忌機を破壊していく…

しかし敵の量が尋常ではなかった、空中の穴は尚も広がり続け大量の仮学兵器を生み出し続けている。

それに反し迎撃システムにも、加勢した本部の軍でさえも消耗を強いられていく。

「くそっ!! 何故急に本部に総攻撃を加えて来たのだ…!!」

「ひょっとしたら、敵はもう総攻撃をかける程の余力しかないのでは?」

「そうか!! なら限界が来るまで押し返すのみだ、確実に一体残さ

ずに打ち落とせえ!!!」

等と本部の官僚が楽観的な予想と指示を出す、しかしどれだけ迎撃仕様の敵の勢いは尽きず逆に確証たいからの補給要請が増えていく。それこそ圧倒的な高速ネットワークを持つ奉雷軍本部であっても対応しきれない程に。

『こちら第33中隊、至急補給を!!!うわ、弾が!!!うわああああああ!!!』

「最終防衛ライン、突破されました!!!」

「馬鹿な!!!こんな事ができるなら何故、今まで奉雷に総攻撃を仕掛けなかったのだ!!!」

『こんの馬鹿もん!!!!!!』

啞然とする本部指令に通信で一喝が入る。
大画面に映ったのは胃腸薬を飲んで落ち着きを取り戻した伊崎だった。

『本部の軍人がここまで墮落しておったとは!!!奴等の侵攻パターンに意味などある訳が無い!!!奴等にとってこの侵略は平面の紙の上をペンで塗り資源にしておる様な物じゃ
迎撃に使用した兵装のエネルギーさえあちらに吸収されておるのが解らんのか!!!』

「ば、馬鹿な!!!」

伊崎の言ったとおりだった、鏡面のように回転するHeZはエネルギー

そう、忌機は確かに既存の人間相手の軍略の前には怪物のような優位性を持つ。

しかし、彼と彼の理屈の前にはそれが意味を成さない。

いくら彼らが魔法によって物量を増やそうが、特殊な軌道を持つ兵器を運用しようが

『最適な運動量で、大量に一瞬で潰せば奴等は戦いその物を損と見なす!!!』

「要は、暴れまわりやいいんだよお……!!!」

斎藤は獰猛な笑みを浮かべ、真下のビルの屋上から忌機の大群へとアンカーガンを放った。

忌機の軍勢も完全に軍へと意識が向いていたのか、アンカーガンが引っ掛かろうと物ともせず侵攻しようとする。

しかしそれが忌き達の運命を大きく左右した、なにせ奴は……

「よっころ……せっ!!!」

忌機为天敵なのだから。

『斎藤が動き出したら、全軍道を開けて撤退せよ!!!本部だけかたくなに守れ!!!』

Mani型忌機の一体の頭部が斎藤の踵で粉碎されると、その指令は同時だった。

「ハアアハハハハハハハハハハ!!!」

地上数百メートル上空で斎藤は器用に空中で回転し、頭が潰れて辛

案山子のような細く人間に近いフォルム、その背中には先ほどまで戦っていたMani型忌機が4つ…玩具の電池のように埋め込まれていた。

軍のデータベースには、そのような忌機の存在が記されていない。それは新型の忌機だった。

『ハメられていた…!! 奴ら、新型の試験運用の為にエネルギーを集める為にあの大群を送ってきていたのか!!』

人体とは、意外にも急所や要所の関節が解りやすくできている、おそらくはこの忌機もそうなのであろう。

しかし、あまりにも巨大なサイズであればその破壊にさえ3次元上の人類は大きなエネルギーの仕様を禁じえない。

しかし異次元に本体を持つ忌機は自身を破壊するエネルギーすら喰らうのだ。

巨人の運用には奴らでさえも通常以上のエネルギーを要するだろう、しかしそれさえクリアし起動すれば齋藤が考案し、辺境の軍が習慣にしてきた『少ない労力で急所の実を破壊する』戦法さえも難しくなる。

これは明らかに自分達の戦法に対処したアップグレードだった。

「くくく…ハハハハハハ!!…!!」

しかし絶望する兵士達と伊崎をよそに、齋藤はまるで喜劇の観客のような笑い声を上げる。

「嬉しいなあ嬉しいげええ!!…!!こつちだつてブチ壊し甲斐があるってもんだ鉄屑どもがアア!!…!!」

両手を広げ叫ぶ狂戦士、齋藤。

その声は斎藤の立つ地面を殴り割る巨人の拳によって強制的に止められた。

轟音とともに割れた道路の下から吹きあがる大規模な土埃で、兵士達の視界が一瞬完全に遮られた。

「そんな…斎藤計一郎が…?」「え、嘘だろう?」「もう駄目だ、お終いだあ…」

そんな囁きが兵士達の間から聞こえ出す。それを遮るように、一つの声が戦場に響く。

「奉雷陸軍忌機対策部特殊戦闘機先行試験部隊、遅くなりましたが加勢しますであります!!」

その声と共に本部落格納庫のシャッターが開き、巨人に続くもう一人の人影がせり出してくる。

軍用に関りなく効率化されたフォーム、追加兵装で白兵用に強化された両腕。

頭部から生えたアンテナはそれが1号と同じ存在であると言う事を物語っていた。

足元には運搬用の強化トレーラー、ロボットの足元に立つのは開発者である夏目だ。

『夏目博士…!!!駄目だ、彼女をこんな急に戦場へやるつもりか!!!』

「残念だが此処まで来て停止命令は聞けないよ臨時総指令さま」
ぐ…と夏目の言葉に言葉を詰まらせる伊崎、彼もまたこの計画に1枚噛んでいたのである。

事情があるとはいえ、彼に今首都防衛の臨時総指令という肩書がある以上

彼に今、『首都を救うという名目で動く』彼女に指示はできても止めることはできない。

夏目はずっとこの時を待っていたのである。

「目には目を、新型には新型を…まさか奴等に先取られるとは思いませんでしたけど、プロモーションには最高に良い環境だ…1号、存分に暴れちゃいな」

『了解…』

夏目の指令に応えるように、1号はロボットの頭部を少し傾かせて応える。

「荒御魂ドライブ接続開始」

誰も座っていないコックピットの後ろの空間、薬液で満たされた一人分の小型ドーム状の空間に立つ1号は、静かな怒りを込めてコードを認証、ただの少女から兵器として本来の機能を起動する。ケーブルが延びて1号の背中に接続し、1号に偽りの『肉体』から本来の『機体』に繋がる感覚を覚えさせる。

「奉雷陸軍忌機対策部特殊戦闘機先行試験部隊、サイノ型特殊兵装機仮設1号機…行くであります！」

言うや否や『1号』はトレーラーの上から駆けだして、案山子の巨人に鉄拳の一撃を加える。

ゴガン！！ という轟音とともに案山子がよろめく。

「少尉殿の仇：！！！」

1号は怒っていた、勝手に行動を起こして勝手に潰えた斎藤を、ギリギリで助けには入れなかった自分自身を、何より全ての原因である目の前の忌機と言う敵を。

荒御魂ドライブとは、言わば魂である。

特定の誰かの物ではなく、人工的に合成された魂を持つ彼女はずっと、自分の心が兵器ではなくただの人と認めてくれる人間と会える日を待ち望んでいた。

合成されて長い間ヒトとして生きる事を支援してくれた伊崎準将もそうだが

彼の紹介で来たと聞いたパイロット候補の斎藤少尉も、（誤解ではあったが）予想外の形であれ自分をただの女の子と認めてくれた理解者だった。

（そんな少尉殿とようやく関わりを持てたのに……！！）

『でええ〜〜りゃあああ〜〜っ！！！！！！』

1号は自分に出せる精一杯の声を張り上げて、案山子の巨人に拳のラッシュを叩き込む。

しかし、案山子の巨人の装甲は思ったよりも硬く決定打を与えるには至らない。

痺れを切らした案山子の巨人が1号の機体を回し蹴りで蹴り飛ばす。

『うああっ……！！！？』

巨体では1号でさえ不可能な程軽やかで重い一撃、恐らくは忌機特有の異次元の仮学による慣性制御。

そこから追い打ちをかけるように案山子の頭部が光り、ビルを一撃で蒸発させるほどの威力を持つ光線が1号に降り注いだ。

『キヤアアアアア!!!!』

『1号!!もう良い、戻れ!!君が戦うにはまだ早すぎる!!』

伊崎が個人回線で1号に戻るよう指示を出す、しかし内部の1号は首を振って拒否する。

「嫌であります!!」

『少尉殿は言っていたであります…戦場に必要なのは英雄じゃなくて軍人だって…でも、あの人も私と同じだったから…!!』

兵器と言われて、奇異な目で見られて、それでも彼は英雄であり続けた…理由はどうであれ、私はあの人が私に相応しいと思ったんであります!!

その斎藤少尉の意思を無駄にして、何の為のサイノ特機であります!!!!』

1号は力を振り絞って機体を立ち上げる、しかし案山子の巨人はその細い腕で1号の首を掴み持ち上げる。

そして頭部にエネルギー兵器のチャージを開始し始めた。

『ウっ…グ……う』

『1号!!逃げるんじゃ1号おオオ!!!!』

「少尉…どの…っ」

内部の1号の閉じた瞳から涙が薬液に浮かんだその時だった。

「よくやったな、大健闘賞ものだぜ」

案山子の巨人の背中にセットされたManiの一体に、軍用の剣銃が突き刺さった。

もう一体にはアンカーガンの至近距離射撃、残る二つには単純な破壊力を持つ蹴りが。

『KVYULGIU+HOLKVYIUGHI+OINLI!!!
!!!!!!!!!!!!!!』

案山子の巨人は激痛を感じた人間のように背中を反り、ガラスと鉄板を擦り合わせた音のような悲鳴を上げた。

その背中から肩へと駆けのぼり、1号の胸部ハッチの上へと飛び乗ったのは紛れもない斎藤計一郎その人だった。

『キヤツ…!!少尉殿!?!』

「馬あ鹿、死ぬわけ無いだろうが俺がああの程度で」

至近射撃で壊れたアンカーガンを放り投げながら呆れたように1号の頭部を見る斎藤だが、額からは血を流し全身に破片によるすり傷を作っていた。

それでも何事も無いように活動できるのだから人間として疑わしいのだが、1号はそれよりも安心感で頭がいつぱいになっていたようだ。

内部の1号も泣いているのか、俯いた1号の機体から泣きながら訴える1号の声が駄々漏れになっていた。

『だって…あんな爆発…しんじやうとおもって…うええ……』

「だああもう泣くな泣くな！んな餓鬼に乗るこっちが恥かしくなるだろうがー！」

斎藤の言葉に1号はふと泣きやんで目（カメラアイも）を見開かせる。

『ふえ…？少尉殿…今、どうして？』

「どうしても何もお前が今勝手に決めたんだろが、明日不調を訴えてもしらねえからな。ほらとつととハッチ開ける」

「……はいっ！了解であります！」

ぶっきらぼうに言う斎藤に、1号は輝くような笑みを浮かべた。

「よし…と」

『システムセットアップ、これよりタンデムモードに移行するであります』

斎藤がハッチから飛びこみコックピットに座ると、1号の意思で半自動的にモニターが起動し斎藤の周囲が1号の視界に染まる。

「タンデムモード？」

『はい、さっきまでは私自身が動かすオートモードなのでありますが…その、本来私はエネルギー源と補助AI専門で…』

後ろで恥かしそうにモジモジする1号をジト目で見ながら斎藤は言う。

「つまりさっきまでは無理して動かしてたからあんなに弱かったって事かよ」

『うう…申し訳ないであります…』

ため息を突いて斎藤はレバーを握る。

「やっぱりお前はポンコツだ」

『ちよっ…！！ヒドイであります、あれでも頑張ったでありますよ！?』

斎藤が座席をつねると後ろの1号が『ヒギヤっ!?!』と飛び上がり沈黙する。

どうやら座席の間隔もあるらしい。

「黙っとけポンコツ、勝手に突っ込んで勝手に壊れようとすんのがポンコツだろうが」

『お前が言っなああああああブッッ!?!?!』

通信による伊崎の怒号を斎藤は片手間に切る。

『指令にはつながるようにしないでいいんですか？』

「というか居たの？あいつ…それより来るぞ？」

斎藤がそう言ってレバーを引くと、間一髪のところでは避けた1号の鼻先を案山子の巨人の拳がかする。

敵は再起動を済ませて再び軽やかな動作で攻撃を開始していた。

『うわわわわっ！？』

「落ちつけ…ふうん動かしやすいのは良い事だな、とりあえず…」

斎藤がレバーを引くと1号の補助のたまものか、斎藤の思い通りに機体が動いた。

1号は流れるような動作で案山子の巨人の胸部に肘鉄を充ててカウンターする。

「1号、主武装は？」

『35mm剣銃砲と、慣性制御ナックル、他タンデムモードでエネルギー運用に余裕ができたので特殊兵装として異相次元干渉が行えるようになりましたであります！』

斎藤は再び座席をつねる。

『みゃぎゃあー！』

「ポンコツ！！それを真っ先に言え！！！！そいつを起動しとけ！！」

斎藤の怒号に涙目ではあいと応えながらも、1号は特殊兵装を起動する。

『荒御魂ドライブ…イグニッション…!』

ドクン!!と心音のような駆動音とともに、1号の全身に淡い緑色の励起光が灯る。

「おつらああああああああ!!!!」

それと同時に渾身の蹴りを斎藤の操作によって放ち、次元干渉を纏った蹴りが案山子の右肩に命中する!!

『u i h p u h o h 、 *) . i j y = ˘ i . - 0 I @ 9 J U O !!!!
!!!!!!!!???.??.??.?!.?!?!?!!?』

再び案山子が悲鳴を上げる、理解不能の現象に案山子が戸惑っている事が二人には容易に理解できた。

異相次元にひそむ本体にもダメージが通ったのである。

案山子は大きく距離を取り、自身を構成するエネルギーさえも残った片腕に集中して1号に最後の1撃を浴びせようと助走をつける。

『ふああ…んああ!!!力が、溢れてくるであります…!!!』

「良いねえ良い具合にテンションが上がってる証拠だ、才能あるぜお前」

身をよじりながらも溢れ出すエネルギーを制御する内側の1号に斎藤は優しく語りかける。

そして、再び元の好戦的な目に戻り殴りかかる様にレバーを思い切

ブッチン！という堅い縄が千切れるような音がして、通信音声が一瞬にして音量の限界を超えた。

『大馬鹿者おおおおオオオおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！』

「んだよ糞爺、ビルが数個倒壊したくらいで被害者もないんだから良いだろうが別に」

「そういう問題じゃないと思うでありますよお」

伊崎の怒号と斎藤の殺気に挟まれて1号は涙目で訴える。
斎藤と1号の背後には見事な瓦礫の山が出来上がっていた。

『はあ…まあいい、1号に免じて許してやろう。その子は僕の孫娘のようなものじゃからな、くれぐれもその子におかしな真似をして見る、全軍を持って後悔させてやるからな』

「は、おとといきやがれってんだ田舎の準将殿」

『ぐ…』と言葉を詰まらせる伊崎だが、通信の向こうで誰かに肩をたたかれる。

『なんじゃ？僕は今猛獣の躰で忙しいんだが…』

『その事ですが準将閣下、本部から準将の功績を認める旨で中津国司令部への移転通知が…確定事項です』

画面外からの声で、伊崎は蓄えたひげの向こうからでもわかる程にあんぐりと口を開ける。

『え？それって…儂も行くの？』

『はい』

『これから斎藤が猛威を振るうであろう中津国に？』

『……………お気の毒ですが…』

感情を感じさせないくそがつく程真面目な軍人の声に、心の底から同情するようなニュアンスが混じる。

ふーっ…と、伊崎の顔から血の気が引いていき…そのまま仰向けにバタン！！と倒れてしまった。

「けっけっけザマア見る勝手に人を昇進させた報いだ馬鹿伊崎」

そのまま斎藤は勝手に通信を切り、振り返って交番に帰ろうと歩み出す。

「少尉殿…」

「気に入らねえが続けてやるよ、パイロット。ちよっくら移転の準備してくるだけだ」

心配する1号の声に斎藤が応え、1号は安堵のため息をつく…しかし

「やっぱり…むなくそわるい」でありますか？私のような人が兵器かもわからない物に乗るのは…」

1号の言葉に斎藤は歩みを止める、それは初めてガレージで出会った時に斎藤がつい言ってしまった一言だった。

「馬あ鹿、何を聞いて嫌がったんだポンコツ。俺はただ餓鬼が戦場

へ行くのが気に入らなかつたんだ

餓鬼が戦って、俺たち大人がそれを使っていい気に浸るような考えが気に入らなかつた…それだけだよ

だいたいそれじゃあ俺はどうなる、忌機以上の化物じゃねえか」

「そんなことは…ッ」

斎藤は振り返って続ける。

「俺もお前も人間だよ、普通より少し機能拡張してるだけのな」

「少尉ど…うにゅっ」

1号がその表情を見るよりも先に、斎藤の広く堅い掌が1号の頭をなでる。

そして1号は納得したようにアンテナをピコピコ振ると、斎藤の後をついていくように共に歩み出した。

かくして異相次元兵器サイノ特機は多少の犠牲を出しつつも首都を
防衛し
兵器としての運用性を奉雷軍、果ては隣国まで知らしめることとなる。

歴史の果ての世界は、たしかに稼働を始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3407s/>

AINo.S

2012年1月10日08時48分発行